

その三

落語

昔は年配の楽しみといった風潮があったかもしれませんが、今では若い女性も多く訪れる落語。座布団の上でたった一人で演じる落語は、日本が誇る話芸の一つ。演じる側の芸が観る側の想像力を駆り立てます。みなさんも寄席に足を運んで、ご鼻屑の落語家を見つけてみませんか。



落語とは？そのはじまり江戸と上方の違い

馴染みの方も多いかと思いますが、落語とは、一人の人物が、座布団の上で身振り手振りを交え一人何役も演じながら鼻を進める芸であり、最後の「落ち（下げ）」が魅力です。

落語家の原型となったのは、室町時代末期から安土桃山時代にかけて、戦国大名のそばに仕え、話の相手をしたり、世情を伝えたりする「御伽衆」おはなししゅうと呼ばれる人たちだといわれています。

その後、江戸時代に入ると、有料で鼻を聞かせる人たちが登場しました。大坂難波では大坂落語の祖「米沢彦八」、京都では上方落語の祖「露の五郎兵衛」、江戸では江戸落語の祖「鹿

野武左衛門」などがほぼ同時期に登場、職業としての落語が始まったとされています。

また落語のスタイルも江戸と上方では、少し違います。江戸落語では道具は手拭いと扇子しか使いませんが、上方落語では見台けんたいと呼ばれる机の上に小拍子という小さな拍子木、その前には膝隠しという衝立が置かれていることが多いのです。話す演目も、江戸では武士と町人が登場する鼻が多いのに対して、上方では商人あきんどがよく登場します。

笑うだけじゃない？

落語の魅力とは こっけい話と人情話

ではどんな鼻が演じられているのでしょうか。時代の流れの中で、その鼻に出てくる題材や職種、用語や道具

東京の落語家には階級制度があります。前座見習いから始まって前座、二ツ目、真打ちと3つの階級に分かれ、修行を通して昇進していきます。一般的に二ツ目から真打ちになるまでは10年かかるといわれていますが、そのスピードは人によりそれぞれです。

弟子入りをした師匠から入門の許可が下りるとまずは前座見習いで、その仕事は師匠（あるいは兄弟子）のかばん持ちなどの雑用と前座になるための修行（落語の稽古、着物の着方やたたみ方、鳴り物の稽古など）が主なものです。前座になると高座に上がることができます。ただ、雑用のほか太鼓を叩くなど寄席でのさまざまな仕事があります。二ツ目では、雑用からは解放され、今

まで着流ししか許されていなかった着用に羽織を着ることが許されます。修行が実ればよいよ真打ちに昇進となります。真打ちでは寄席で一番最後に出演する資格を持ち、弟子を取ることができます。

ようやくになった真打ちですが、ここからが本当の修行といえるかもしれません。

一方、上方には明確な階級制度はないようです。身分的な上下関係ではなく実力と人気による自由な気風がそうさせているのかもしれませんが、とはいいつつも、出演順など便宜上、芸歴5年程度を中座、15年以上で真打ちという目安は暗黙の内にあるようです。

が使われなくなり、高座にかからなくなってしまった噺も少なくありません。現代でも頻繁に演じられている古典落語の中から、お金に関係する噺をいくつか紹介しましょう。

寒い冬の夜、夜鳴きそばを頼んだ客が、代金の十六文を一文ずつ支払うときに、ふいに「今なんどきだい？」と時間を聞いて、店主が答えた時間を勘定に入れて一文ごまかす様子を見ていた男。今度は自分が別の店でそれを真似してみるが、時間が違うので逆に一文多く払ってしまうという『時そば』。こっけい話として代表的な演目ですが、上方では『時うどん』として演じられます。

また落語は笑う噺ばかりではありません。例えば人間の喜怒哀楽を表現しながら涙を誘う「人情噺」。中でも代表的な噺に『芝浜』という演目があります。この噺は最後の場面が大晦日であるため、12月に演じられることが多い、いわゆる「大ネタ」（落語家の力量が必要な大作）の一つです。

酒が好きで借金まみれの魚屋の勝五郎が、ある朝、芝の浜で財布を拾う。帰って財布を見ると五十両入っている。勝五郎は祝い酒だと友だちを呼

び、どんちゃん騒ぎの後、酔っぱらって寝てしまう。翌朝、女房はいつもどおり勝五郎をたたき起こし、「財布？なんのこと？」と嘘をつき通しすべて夢だったと思わせる。勝五郎は大いに反省し、酒を断ち朝から晩までまじめに働き始めた。その甲斐もあり、借金を返し今では蓄えもできるようになった三年後の大晦日の夜、女房は勝五郎にすべてを打ち明ける。勝五郎は怒るところか女房によく騙してくれたと礼を言う。そして女房に断っていた酒を勧められるが、杯を口まで持っていきかけたところで「よそう、また夢になるといけねえ」と「下げ」の一言で終わります。喜怒哀楽が豊かに語られる『芝浜』は、一生懸命に生きる人々の健気さが、時代を超え私たちを落語の魅力に引き込んでいきます。

落語を聴くには？

落語に興味を持ったなら、まずは寄席に出かけてみましょう。寄席とは、落語を中心に漫才やマジックなどのさまざまな演芸を楽しむことのできる会場（または公演）のことです（ちなみに漫才やマジックなどは、出演者の名前

が赤色で描かれていることから「色物」と呼ばれています）。基本的に1年365日年中無休で興行している定席の寄席は、東京では上野鈴本演芸場、浅草演芸ホール、新宿末廣亭、池袋演芸場の4カ所、大阪の天満天神繁昌亭、名古屋の大須演芸場があります。定席の寄席では、一カ月を10日ずつ上席、中席、下席と区切り、一日を昼の部、夜の部と出演者を分けて興行を行っています。多くの落語家が登場するので、いろいろな噺に出合うことができますでしょう。また、毎日ではありませんが、国立演芸場やお江戸日本橋亭をはじめさまざまな演芸場で落語の公演があります。

演芸場以外で鑑賞するにはホール落語があります。普段は、コンサートや芝居を上演する劇場などで開催するホール落語では、落語家一人当たりの上演時間が長く、お目当ての落語家を十分に堪能することが可能です。

古典から新作まで、言葉の芸をライブで楽しむ落語。ぜひお気に入りの落語家や演目を見つけて楽しんでください。